

皆様、おはようございます。

ついに4月に入り、新年度を迎えております。

受難節も進んでまいりまして、いよいよ来週は受難週です。

ヨハネの福音書から読み進めてまいりました。

15:23 わたしを憎む者は、わたしの父をも憎む。

15:24 もし、ほかのだれもがしなかったようなわざを、わたしが彼らの間でしなかったならば、彼らは罪を犯さないですんだであろう。しかし事実、彼らはわたしとわたしの父とを見て、憎んだのである。

15:25 それは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と書いてある彼らの律法の言葉が成就するためである。

この詩篇 69:4 の御言葉は成就され、イエス様は理由もなく憎まれ、迫害され、十字架への道へと向かっていかれます。

弟子たちは悲しみ、不安がり、次の御言葉の通りになります。

16:32 見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにきている。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。

しかしイエス様には平安がありました。父なる神様は決してイエス様を捨てて一人にはなさないという事を信じぬいておられました。そしてやがて散り散りになる弟子たちのために、イエス様はこの御言葉を語られました。

16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。

多くの悩みがあります。哀しみが、不安があり、私たちは正しく行くべき道を選び取るこのできない弱さと失敗があります。しかし、世に勝利したお方が、私たちがいつも赦して引き上げて下さいます。世の悪の勢力、人の傲慢無知の情念は恐ろしく力強いものですが、しかし主はそういう世の諸方に勝利されたお方です。私たちはその強力な力の中で右へ左へと吹き流され、押しつぶされそうになるのですが、しかし主のもとに平安が、勝利があります。ですから、私たちは勇気を失わないようにしましょう。世を挙げて理由もなく私たちが憎まれ、見捨てられるようなことが起こっても、神様は、イエス様は、聖霊様は私たちをお見捨てにはなさいません。私たちに平安を与えて下さいます。喜びに満たして下さいます。試練から脱出させて下さいます。主はもうすでに、世に勝利されたからです。

ヨハネ17章では、イエス様の執り成しの祈りがありました。

そして18章では、いよいよ兵士たちがやってきて、イエス様を捕らえると、弟子たちは散り散りに逃げ去ってしまいました。ペテロだけが辛うじて、イエス様の後を追っていきますが、「あなたも、あ

の人の弟子のひとりではありませんか」とロタに尋ねられると、その都度打ち消して知らないと言
い、3度否んだところで鶏が鳴きました。「鶏が鳴く前にあなたは私を知らないと言3度言うだろう」イ
エス様が予告なさったとおりになっていました。

大祭司たちは、イエス様を亡き者にしようとしていましたが、その口実を見つけることが出来ず、つ
いに「自分を神の子だ」と言ったことについて、神への冒瀆であると断定しました。

ルカ 22:69 しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。

22:70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言う
とおりである」。

22:71 すると彼らは言った、「これ以上、なんの証拠があるか。われわれは直接彼の口から聞いた
のだから」。

しかしピラトへの訴えにおいては、自分を神とするゆえの冒瀆という出来事は、ユダヤ教の中だけ
の事であり、ピラトの扱うローマの法律に触れないであろうことから、次のように言い換えて告発し
ました。

23:2 そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めること
を禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。

「自分こそ王なるキリスト」こう言い換えれば、ローマの皇帝カエサルにとっても、別の王を立てて

反逆するというユダヤの罪をアピールすることが出来る。そのようにユダヤがイエス・キリストの元で反乱の機運が高まったら、総督としてのピラトの立場も悪くなるから裁かざるを得ないという方法をとった訳です。

そこでピラトとイエス様との間でこのような会話がなされました。

18:33 さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。

18:34 イエスは答えられた、「あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」。

18:35 ピラトは答えた、「わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか」。

18:36 イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。

18:37 そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだ」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおりに、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」

18:38 ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出て行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない」。

18:39 過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人を許してやるのが、あなたがた

のしきたりになっている。ついては、あなたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか」。

18:40 すると彼らは、また叫んで「その人ではなく、バラバを」と言った。このバラバは強盗であった。

ピラトは、イエス様から何らローマへの反逆といった政治的な姿勢が見いだされないのを見、凶悪な犯罪者バラバを釈放してまでこの人を殺そうとする民の意志を理解することが出来ず、何とか正義が成るようと画策します。しかし祭司長たちのイエス様への殺意があまりにも強く、その働きかけがあまりにも執拗であるためについに祭司長たちの要求に屈してしまうのです。

『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』この人間の憎しみの情念とは、いかに強いものなのでしょうか。

詩篇69篇には、子の憎しみのるつぼに置かれた人の、神への祈りが記されています。

69:1 神よ、わたしをお救いください。大水が流れ来て、わたしの首にまで達しました。

69:2 わたしは足がかりもない深い泥の中に沈みました。わたしは深い水に陥り、大水がわたしの上を流れ過ぎました。

69:3 わたしは叫びによって疲れ、わたしののどはかわき、わたしの目は神を待ちわびて衰えました。

69:4 ゆえなく、わたしを憎む者は／わたしの頭の毛よりも多く、偽ってわたしの敵となり、わたしを滅ぼそうとする者は強いのです。わたしは盗まなかった物をも／償わなければならないのですか。

正しいか、間違っているのかを論ずるのではなくて、人は頭に血が上って、もうそんなことはどうでもいい、憎いか憎くないかで判断するのだと、本当に常軌を逸した判断をしてしまうものです。そしてその力が強いとあれば、どんなに陰湿ないじめであろうとも、誰も何も異を唱えることが出来ずに、止めることも出来ずにそれがエスカレートしていく。強い者の論理。強い者の世の中。弱い者はただ我慢するのみ。屈服されるがまま。そういう不正義というものが、世の常であるとしたら、なんと悲しいことでしょうか。しかし、人の世とは、しばしばそういう事が起こるものです。

『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』。理由なんてどうでもいい、憎いから憎しむんだという状況のつぼの中にイエス様はおられました。

19:1 そこでピラトは、イエスを捕え、おちで打たせた。

19:2 兵卒たちは、いばらで冠をあんて、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、

19:3 それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。

19:4 するとピラトは、また出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。

ピラトは、イエス様をある程度苦しませ、馬鹿にしたのならば、祭司長たちの気が収まるものだと思います。

19:5 イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。

19:6 祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫んだ。ピラトは言った。「あなたたちが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。」

19:7 ユダヤ人たちは答えた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」

19:8 ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ、

19:9 再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。

イエス様を打ちたたいてやつれさせ、それでいて王の衣装をまとわせて笑いものにし、王として反逆しようなんて気がさらさらないと演出し、それでもなおあなた方は罪のないこの人を十字架につけようとするのか、私はこのことに関わらないからあなた方で勝手に死刑にするがよいとピラトは語りますが、祭司長たちはついに自分たちの律法により、自らを神の子と称するこの人は死罪に値するという事を語りました。

ピラトはイエス様と直接語り、自らを神とするこの人はいったい何者であるのかを確かめようとした。しかしイエス様は彼に答えようとはされません。

19:10 そこでピラトは言った、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。

19:11 イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」。

19:12 これを聞いて、ピラトはイエスを許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。

強大なローの帝国の総督を務める人に対して、恐れもなしに「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。」と語り、「だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」。との言葉に、ピラトは権威ある者であるにもかかわらず、何か自分の権威に勝るような、「上から賜る」権威を感じ、このイエス様が神の子であるといったユダヤ人の言葉は、本当にその通りであるとの考察が必要なのではないか、そうでなければ、イエス様が語られた通り、その天から権威を賜った人を処するならば、罪に定められるのではないかと、とっさに悟ったのでした。だからピラトはイエス様を赦そうと努めたのです。

神様を信じて神様を証しすべき民が墮落し、腐敗し、彼らが信ずべきお方をないがしろにし、敵意をおき出しにして取り除こうと躍起になっていた時、奇しくも異邦人であるローマの総督であるピラトが、その権威を感じて畏れる心をもっていたという事は、本当に皮肉なことです。ユダヤ人の祭司長ら、中枢の指導者たちは、彼らが普段蔑み、軽蔑していた「異邦人」よりはるかに劣って及ばないものとなっていたという事がはっきりと記してあります。

しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。

19:13 ピラトはこれらの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石（ヘブル語ではガバタ）という場所で裁判の席についた。

19:14 その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。

19:15 すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。

19:16 そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。

ついにユダヤ人たちはこぞって、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」とまで言って

しまいました。これはピラトの権力を利用するための方便でしたが、しかし、彼らが神を神としない不遜が図らずも、まったく表面化してしまった出来事でした。

ルカ 12:1 その間に、おびただしい群衆が、互に踏み合うほどに群がってきたが、イエスはまず弟子たちに語りはじめられた、「パリサイ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい。

12:2 おおいかぶされたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない。

「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」と、執拗に死を要求する神の民の指導者たち。これは完全に狂気でした。そしてその罪の性質を私たちも中に持っているという事を心に留めたいと思います。

指導者たちはピラトに対して強弁し、脅迫し、方便を使い、あの手この手でピラトを責め、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」とまで言ってイエス様を死に追いやりました。それは成功したように見えました。殺意に燃え、情念の限りを尽くして彼らはそれに成功しました。ピラトはむしろ「この人に罪は見いだされない」と語りましたが、それをはねつけて、ユダヤ人たちは死刑を勝ち取りました。しかしそれは彼らが神の子を是が非でも殺そうとしたという事、罪の明白なる証でした。彼らはイエス様を死罪に追いやったように見えますが、神様は、その明白なる神の民の離反と反逆の罪を負わせるために、計画的にイエス様をその罪の贖いとして十字架に赴かせておられたのでした。

祭司長たちのその後は哀れでした。自分の民をすべてイエス様が連れて行ってしまいますと言って、妬みの念に燃えてイエス様を追いやりましたが、しかしイエス様の死後、聖所を隔てる幕は切り裂け、イエス様の血潮によって、誰でも、祭司を通さずに救いが訪れ、紀元70年、ついには神殿さえも木っ端みじんに壊されました。

そのような人の愚かさ、憎しみの情念、罪の性質から救うためにイエス様が進まれた救いの道について、唯々畏れを抱くばかりです。

理由なく恨まれ、憎まれ、弟子たちからも見捨てられ、それでもなお父なる神様が私と共にいるとの確信に立って進まれたイエス様を思い起こし、私たちも、困難の中にも、憎まれる時にも、孤独の時にも、イエス様による平安を求めて進ませていただきたいと願います。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。「人々は理由もなく、わたしを憎んだ」との御言葉が成就し、人々はこぞってイエス様を憎み、「私たちには、皇帝のほかに王はありません」とまで言って処刑しようとしていました。その場しのぎで言った言葉は、本当に彼らの神無き信仰を言い表していました。人のここまでの反逆にもかかわらず、神様はイエス様を、人の企てによってではなく、そのみ旨のうちに十字架に贖いとして捧げて下さいました。子供からお年寄りまで、あらゆる年齢の方々が、この時こそ教会にて、

イエス・キリストに出会うことができますようにお願いいたします。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン